NY エッセイ 66

中瀬有紀

アメリカと日本の間で思うこと

ブライアント・パークの夜10時

先日、建築の研究と博士号取得のために日本に留学しているイタリア人の友人が、「日本にいると自由でいられる」と言いました。彼は母国にいると国の歴史や様式に縛られて自由に創作活動ができないと訴え、逆に日本にいると外国人であるがゆえに日本人と違う行動様式を持ち合わせていることに自他共に寛容でいられ、研究に没頭できるのだそうです。民族が培ってきた物事を潤滑に成すための秘訣や集団行動における決まりごとは「雑音」であり、そこから解放されることにより目の前にある案件が何を求めているかの核心に触れやすい、と言います。異文化に身を置くことで自身を開放している、という彼の発言に共感しました。

私がアメリカで照明の仕事をすることを楽しいと感じるのも、彼のように文化の違いが影響しているかもしれません。私自身が外国人であること、アメリカが移民の国であること、多国籍の作品と芸術家がニューヨークへ訪れることなどから、常にさまざまな国の人達と仕事をしています。業務上取り扱う商品、演劇、舞踊、テレビ番組、ファッションなどがすべて文化そのものであり、ニューヨークでの照明業務は私にとってまさに文化の坩堝です。異文化の例として、雑談、食事、そして個人主体のアメリカ社会について以下に書かせていただきます。

現場で今日のお天気とお互いの洋服をほめあうことに始まり、最近見た作品や読んだ記事などについての雑談が人間関係形成において非常に重要であることは、日本人の雑談に対する感覚と少し違うように感じます。最近一緒に仕事をしたオランダ人照明デザイナーは、初対面の挨拶から雑談を一段落して照明業務を開始するまでに約30分ほどかかり、フォーカス中も常に彼のオランダでの作品についてやヨーロッパで活躍する日本人ダンサーについて、写真も交えながら私に語り続けました。また、グループのメンバー全員が単一民族である確率が低いため、一緒に食事をする際はそれぞれの宗教の規則や嗜好を尊重し、全員が同じものを注文しなかったり、お酒を飲む人と飲まない人がいるのが普通です。さらに、会社主体の日本社会と比べて、個人主体のアメリカ社会という違いも明白です。初対面で「君どこの人?」という質問ではなく、「何やってる人?」と聞かれます。したがって、名刺交換ではなく握手から会話が始まります。挨拶の一環として、最近携わった作品の小話をスマートフォンの写真を交えて話す準備をしておくといいでしょう。そしてお互いの気が合えば、連絡先の交換として名刺交換がなされます。照明家はデザイナーもオペレーターもほとんどが個人事業またはフリーランサーなので、必要に応じて個人はユニオンやエージェントに所属して身を守ります。この現状は、照明家の所属する組織の色が作品に響かない点や、常に一寸先は闇という雇用状況から自らが運営と宣伝を担い、毎回の現場で全力投球せざるを得ないなどの特徴が挙げられます。

女性が男性の所有物であると見なす文化について友人間で雑談していたとき、そのうちの一人が「同じように考え行動する人よりも、自分と違う考え方を持つ人との出会いのほうが刺激的だ」と言っていたのを思い出しました。多少の摩擦はあれど、異文化を受け入れることにより自身の持ち合わせる文化の長所をより活かすことができるのではないか、と思う今日この頃です。